

2020-21年度レギュラーコースカリキュラム報告 —アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの集中日本語教育—

秋 澤 委太郎

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、①10カ月間にわたるレギュラーコース、②夏期集中コース、③夏期漢文コースの3種類の集中日本語教育が行われている。本稿は①のレギュラーコースについて報告するものであり、他については[千田 \(2021\)](#) と [大竹 \(2021\)](#) を参照されたい。

レギュラーコースの期間は2020年9月7日から2021年6月11日までの40週間で、学生数は55名（うち博士課程11名修士課程19名その他25名）、指導にあたった教員は常勤教員8名、非常勤教員8名であった。

2 レギュラーコースの概要

40週間のレギュラーコースは4学期に分かれており、各学期の間には休みがある。今年度の第1学期は9月7日から10月30日までの8週間、第2学期は11月9日から12月23日の7週間、第3学期は1月18日から3月12日までの8週間、第4学期は3月29日から6月11日までの11週間で実施された。第1学期と第2学期を「前期」、第3学期と第4学期を「後期」と呼んでいる。前期は主に日本語の構造や知識の習得に比重がおかれ、後期は各学生の専門や関心領域に近い内容に焦点をあてた科目を選択することが可能になるという点に違いがある。

例年であれば毎日の授業は午前と午後に分かれており、午前の授業は文法など言語の形式面を重視するが、午後の授業は聴解、読解、発話等の総合的な言語の運用力を高めることを目的としている。そのため、「前期」にあたる第1学期の午前は「文法」「待遇表現」、午後は「総合運用Ⅰ」という科目が設定され、第2学期の午前は「接続表現」「統合日本語Ⅰ」、午後は「総合運用Ⅱ」が実施される。ここまでは全学生共通である。「後期」にあたる第3学期は、午前は「統合日本語Ⅱ」が共通であるが、「選択A」「選択B」そして午後の「総合運用Ⅲ」は各学生が自分の関心領域に合わせて科目を選択することが可能である。さらに第4学期の午前は第3学期と同じコースが設定され、午後は「プロジェクトワーク」「グループ学習」「日本語能力試験N1・N2レベル文法クラス」のいずれか希望するものを一つ選択することができる。第3・第4学期には、随意に履修できる文語文法等のオプション授業も用意されている（「選択C」）。

2020-2021 年度 40 週間のレギュラーコース日程

週	8:00-8:25 1限 非同期授業 8:30-10:10 2~3限 通常授業	10:30-11:50 4限 通常授業 水4限は「クラブ活動」、金4限は「寺子屋」	
1	オリエンテーション・試験・面談	オリエンテーション・面談など	↑
2	文法	総合運用 I	↓
3			↓
4			第1学期
5			9/7-10/30
6			8週間
7	待遇表現	クラブ活動 (水曜) 寺子屋 (金曜)	↓
8			↓
9	秋休み 1週間 10月31日(土)~11月8日(日)		
10	接続表現	総合運用 II	↑
11	統合日本語 I	クラブ活動 (水曜) 寺子屋 (金曜)	↓
12			第2学期
13			11/9-12/23
14			7週間
15			↓
16			↓
17-19	冬休み 3週間 12月24日(木)~1月17日(日)		
20	統合 日本語 II	総合運用 III	↑
21			↓
22			第3学期
23			1/18-3/12
24			8週間
25			↓
26			↓
27			↓
28-29	春休み 2週間 3月13日(土)~3月28日(日)		
30	統合 日本語 III	プロジェクト/グループ学習/ N1・N2レベル文法 選択 C 自主運営クラブ	↑
31			↓
32			↓
33			第4学期
34			3/29-6/11
35	GW 休み 1週間 4月29日(木)~5月5日(水)		11週間
36	統合 日本語 III	プロジェクトワーク等	授業は実質
37			8週間
38			↓
39	試験5/31月、発表準備	試験5/31月、発表準備	↓
40	発表6/7-8月火、面談6/9-10水木	発表6/7-8月火、面談6/9-10水木	↓

3 今年度の特殊事情

上掲の日程表は基本的に例年と同様であるが、今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため第1学期から第4学期まですべての教育活動を完全にオンラインで行ったことが大きな違いである。年度開始当初は第3学期からの対面教育再開を目指していたが、残念ながら感染症禍が収束の兆しを見ることはなく、学生を日本に受け入れることは困難な情勢が続いたため、第1学期中の10月11日に、今年度第3・第4学期もオンライン体制を継続することが決定された。

本センターでは教育の完全オンライン化をすでに昨年度レギュラーコース第4学期とその後に関講された夏期コースで実施しており、その際に学生と教員から建設的なフィードバックを得ることができた¹。今年度レギュラーコースは昨年度第4学期の体制を踏襲しつつ、これらの経験とフィードバックを参考に改善を図った。以下にその詳細を述べる。

3-1 オンライン教育のために利用したサービス

授業や学生との面談、そして発表会や講演会などのイベントを Zoom²のミーティングプラットフォーム上で行った。年度開始時と終了時の実力試験(9-1-2参照)には Google フォーム³と Quilgo⁴を併用した。卒業パーティー、「教員室」(教職員のための交流スペース)、そして「寺子屋」と「自習室」(3-2-2参照)には Remo⁵を用いた。以上は昨年度第4学期から継続して使っているサービスである。

今年度は新たに、学生への連絡事項や授業・イベントスケジュールの提示、そして課題の指示・提出・採点のために Google Classroom⁶を採用した。全体的な連絡には「連絡掲示板」クラスルーム⁷を、そして各授業科目あるいはセクションごとに1つのクラスルームを設置した⁸。漢字学習プログラム SKIP(9-2参照)、実力試験、「クラブ活動」、そして「寺子屋」もそれぞれのクラスルームを用いて運営された。

従来紙で学生に配布されていた練習問題や予習シートなどは、必要に応じ Google ドキュメント⁹などを用いてデジタルフォーマットに作り替えた。

教職員同士の日々のやりとりには、従来用いていた Google Chat¹⁰よりも多機能で柔軟な Slack¹¹を採用した。Slack は、本校スタンフォードオフィス¹²が学生同士の交流の場を開設するためにも用いられた。

3-2 毎日の授業スケジュール

日本との時差が大きい地域からオンライン授業に参加する学生のため、昨年度第4学期は第3週から授業終了時刻を早めて12:30とした。しかしそれでも、特に米国東海岸に居住する学生にとっては深夜23:30に至ってようやく1日の授業が終わるという厳しいスケジュールだった。数週間程度の臨時措置ならともかく、それ以上の長期にわたってオンラ

イン体制を継続するのであれば、授業終了時刻はもっと早めることが求められる。一方、そのために単純に開始時刻も早めたら教員の生活に無理が生じるので、授業開始は早朝になりすぎないようにしたい。このような条件を満たすため、今年度は授業開始を 8:00、終了を 11:50 とし、例年の昼休みにあたる時間を昨年度第 4 学期よりさらに 10 分短縮して 20 分とした。具体的な時間割は以下の通りである。

1 限：8:00 – 8:25 非同期的授業

(5 分休憩)

2 限：8:30 – 9:15 通常授業

(10 分休憩)

3 限：9:25 – 10:10 通常授業

(20 分休憩)

4 限：10:30 – 11:50 通常授業、または「クラブ活動」「寺子屋」など

2・3 限の目的・位置付けは例年の午前の授業に相当し（言語の形式面重視）、4 限の通常授業は午後の授業にあたる（総合的な言語運用能力重視）。しかし、限られた時間帯に授業を詰め込むことによる学生と教員の疲労を軽減するため、各時限の授業時間を短くした。通常の対面授業の時間割は 1 コマ 50 分、1 日あたり午前 2 コマ + 午後 2 コマだが、今年度は通常時の午前の授業に相当する 2・3 限をそれぞれ 45 分間とし（計 10 分の短縮）、午後の授業に相当する 4 限を 80 分間とした（20 分の短縮）。4 限の短縮時間は 1 コマあたりの値に換算すれば 10 分になる¹³。

そして、オンライン教育環境では不足しがちになる気軽な交流の場、互いに刺激を与え合う場を作って学生の仲間意識を育てるため、新設の 1 限、および 4 限の「クラブ活動」と「寺子屋」で例年のプログラムにない内容の活動を試みた¹⁴。

3-2-1 1 限（非同期的授業）

1 限は、学生間のコミュニケーションを活発にして自律的・共同的な学習を促す目的で設置された、非同期的授業の時間である¹⁵。ここで言う「非同期的」とは、教員の学生に対する指導が非同期的に行われるという意味である。学生たちは 2・3 限の Zoom に集合して同じ時間を共有する¹⁶。自習と通常授業の中間に位置するような活動と言えるだろう。

学生はクラスメートと相談しながら、教員によって事前に指示された課題を行った。教員は原則として 1 限の授業に参加せず、この時間に学生が取り組んだ課題に対しては他の時間にフィードバックを行ったが、学生同士の話し合いを見守るなど、同期的に授業に参加する場合もあった。課題の指示とフィードバックは 2・3 限の授業を担当した教員が行った。課題は例えば文法の小テストや「毎日のスキル¹⁷」等の練習問題を解く、あるいは

他の授業時間内に十分論じ尽くせなかった話題について改めて議論するなど、2・3限の復習または補足的な内容である場合が多かったが、4限の授業に関連する活動（単語クイズ等）をこの時間に行う場合もあった¹⁸。

3-2-2 水曜4限「クラブ活動」と金曜4限「寺子屋」

4限では、月・火・木曜は通常の実用英語の授業を行ったが、水曜は「クラブ活動」、金曜は「寺子屋」をそれぞれ実施した。1限は2・3限の科目・セッションごとの活動であるのに対し、「クラブ活動」と「寺子屋」は科目・セッションの枠を離れた活動である。

「クラブ活動」は中学校や高校のクラブ活動のようなイメージで、学生が普段の授業で顔を合わせない相手とも交流を図れるようにする、そして楽しみながらリラックスして日本語が使える機会を提供する目的で行われた。第1・第2学期は教職員が様々なクラブを開設し、各クラブごとのZoomミーティングを立ち上げて話し合いや軽い運動などの活動を主宰した¹⁹。学生は必ずいずれかのクラブに参加することとしたが、参加クラブの変更は随時認めた。第3・第4学期はこうした位置付けを変更して「自主運営クラブ」とし、学生の参加は義務とせず、活動を希望する有志がメンバーを組織して任意の曜日に開催した²⁰。教職員は顧問として自主運営クラブの活動やメンバー募集を支援した。

「寺子屋」は江戸時代の寺子屋をイメージしたもので、Remoを用いて学生同士の気楽な交流を図ること、また一人で自習していても仲間の存在を感じられるようにして学習意欲の低下を防ぐことを目的に行われた²¹。教員がそこでいわゆるクラス授業を行うことはなかったが、あくまで授業の一環として学生には参加を義務化した。寺子屋の開催中には本センター教材助手が漢字の書き方を指導する30分間の「漢字ミニ講座」もZoomで開講され、学生は寺子屋をいったん離れて任意に参加することができた。また必要に応じて、専任教員による学生の個別指導の時間もこの時間枠内に設けられた。第4学期には寺子屋は開催せず、その代わりに毎週月～金曜の午前10時10分から午後12時40分までRemoを教員不在の「自習室」として開放し、勉強や雑談のためのオンライン空間を学生に提供した²²。

3-3 セクション編成

例年、午前の授業（文法）と午後の授業（総合運用）の各セッションは異なるメンバーで編成し、異なる担任をつける。そして学期ごとに必要性を考慮した上で可能な限り編成替えをし、学生が新鮮な気持ちで学習に臨める雰囲気維持を図る。今年度は、そこにオンライン体制ゆえの配慮を加えた。

第1学期は、1限から4限まで同じメンバーそして同じ担任でセッションを編成した。例年の第1学期は、例えばある学生は文法が苦手なので午前は低いレベルのセッションに入れるが、漢字は得意で文章を読むことに苦労しないので午後ではレベルが高めのセクシ

ョンに入れる、というように各学生の能力バランスを考慮してメンバー編成を決めている。しかし今年度は対面での入学式とオリエンテーションを行うことができず、その前後の時間に学生同士が互いに親しむ機会もないことから、特に第1学期は学生が例年よりも授業や宿題のやり方について多くの混乱を経験するであろうこと、そして授業で初めて会うクラスメートに対してより強い警戒心を抱くであろうことが懸念された。そうした混乱や警戒心を軽減するため、第1学期は1日の授業をすべて同じメンバーで行うこととしたわけである。

第2学期は気分を変えて新鮮さを確保するため、例年のように「接続表現・統合日本語Ⅰ」も「総合運用Ⅱ」もそれぞれに編成を組み直し、担任も別々の教員をあてた。

第3・第4学期は選択科目が多く設置され、それまで知らなかった相手と新たにクラスメートになる機会も増える。そこで、逆に第2学期「接続表現・統合日本語Ⅰ」以降第4学期「統合日本語Ⅲ」にいたる2・3限の文法の授業は同じ担任のもとに同じメンバー編成を維持し、各セッションごとの連帯感を醸成した。

4 第1学期の教育内容

月～金曜の2・3限は最初の5週間を「文法」に、その後の2週間を「待遇表現」にあてた。月・火・木曜の4限は「総合運用Ⅰ」を7週間実施した。水曜4限と金曜4限は、それぞれ「クラブ活動²³」と「寺子屋」を実施した。「クラブ活動」と「寺子屋」の内容については上の3-2-2を参照されたい。

4-1 2・3限の内容

4-1-1 文法

入学直後の第1学期2・3限では、中級学習者にとって理解が難しく誤りやすい文法事項を取り上げ、知識を整理し正確さを高めながら運用力を向上させた。『Japanese Grammar』（本センター作成）、『An Introduction to Advanced Spoken Japanese』（本センター作成）のいずれかを、各セッションの日本語習熟度に応じて使用した。また、セッションによっては敬語とその随伴行動の学習準備として「プレ待遇表現（動画スキット全4回）」（本センター作成）を導入した。23日間46コマをこの指導にあてた²⁴。

4-1-2 待遇表現

円滑な人間関係を構築できるよう、敬語とその随伴行動、社会慣習、礼儀、挨拶などを含めた言語行動を取り上げた。主教材として『新待遇表現』（本センター作成）を用いた。9日間18コマを指導にあてた。

4-2 4限（通常授業）の内容

4-2-1 総合運用Ⅰ

月・火・木曜4限の「総合運用」は、主として読解、聴解、発話などの技能面に焦点をあて、文字通り総合的な日本語運用力の向上を目指した。第1学期は身近で日常的な話題を扱った「経験談」という単元から開始し、自然な話し方に慣れるとともに、既習の文法事項などを総合的に活用する機会を提供した。単元の最後には、卒業生が教職員をインタビューしたビデオを参考に学生自身がインタビュー活動を行い、内容について授業で発表を行った。続いて新聞やニュースを教材とする社会性をおびた単元に進み、日本事情や時事的話題に関する語彙・表現の習得と運用力向上を促した。19日間38コマをあてた。

5 第2学期の教育内容

2・3限に「接続表現」を2週間、その後「統合日本語Ⅰ」を5週間、月・火・木曜4限に「総合運用Ⅱ」を7週間実施した。水曜4限と金曜4限には、それぞれ「クラブ活動」と「寺子屋」を実施した。

5-1 2・3限の内容

5-1-1 接続表現

接続詞に注目し、文と文の接続、段落や文章の組み立て方（複段落の作成）について指導した。教材として『接続表現』（本センター作成）を用いた。10日間20コマをこの指導にあてた。

5-1-2 統合日本語Ⅰ

一般的な中級段階の日本語から、より高度で専門的な日本語への橋渡しをするために、『統合日本語 Integrated Japanese Advanced Course』（本センター作成）を用いた。各課は同一の話題をめぐる「文章編」と「会話編」からなり、「文章編」では読解練習とそこで扱われる文型・語彙・表現を学び、「会話編」では自然な話し言葉を状況に応じて使い分けられるよう指導した。2分冊の上巻第1～3課を第2学期に、下巻第4～5課を第3学期に扱った²⁵。指導には21日間42コマをあてた。このうち12月22日の2・3限はミニ発表会を行い、「統合日本語Ⅰ」で学んだ知識や技能を整理する機会とした。

5-2 4限（通常授業）の内容

5-2-1 総合運用Ⅱ

月・火・木曜4限の「総合運用Ⅱ」では、現代社会の問題をめぐる生の教材、例えば新聞・雑誌記事や報道番組などを読解・聴解し、話し合いを重ねることによって、類似した一般的な話題についても日本人と話し合える能力の獲得を目指した。教材は、話題シラバスのモジュール型教材群「外国人と国籍」「文化の発信」「ものづくり」「教育」「現代の若者たち」「働き方」「地球環境」「差別と人権」「情報化社会」の中から学生の興味や関心あるいは必要性に応じて各セクションごとに選び、授業進度も各セクションの理解度に合わせて調整した。ただし、「外国人と国籍」に関しては全セクション必修とした。19日間38コマを指導にあてた。

6 第3学期の授業内容

冬休みが明けた1月から第3学期が始まり、各学生の専門・興味・関心・必要性に応じた選択授業が増える。

2・3限は、月曜と水曜に「選択A」、火曜に「選択B」、木曜と金曜に「統合日本語Ⅱ」を実施した。4限は、月・火・木曜に「総合運用Ⅲ」、水曜に随意科目の「選択C」、金曜に「寺子屋」を実施した。

6-1 2・3限の内容

6-1-1 統合日本語Ⅱ

第3学期に全学生が共通の教材で学ぶ授業はこの「統合日本語Ⅱ」のみである。『統合日本語 Integrated Japanese Advanced Course』（本センター作成）下巻を教材に、木曜と金曜の週2日、計15日間30コマ実施した。最終週の2日間はミニ発表会を行い、「統合日本語Ⅱ」で学んだ知識や技能を整理する機会とした。

6-1-2 選択A

自分の専門領域に関連するコースを1つ選び、将来の学術研究や専門実務に資する言語面の能力育成に取り組む科目である。学生には第3・第4学期を通じて同じコースを継続履修するよう奨励した。コース選択に迷う学生のため、「選択Aお試しクラス」と称し、第2学期中の11月20日4限に各コースの説明と質問受付の機会を設けた。本年度は「政治」「文学」「歴史学」「法律」「日本学概論」の5コースを開設した。月曜と水曜、計16日間32コマ実施した。

・政治

第3学期は大学生向けの教科書を読み、日本政治や政治学に対する理解を深めた。授業では読み物の内容確認、単語クイズ、議論などを行い、専門用語の定着を図った。また、毎回の授業で政治のニュースを取り上げ、理論と実社会とのつながりを考えさせたり、政治の問題を自分の問題として意識させたりした。第4学期は学生の意見を取り入れ「国際政治」「安全保障」「領土問題」などのテーマを扱った。また、オンラインで田園調布学園大学の学生との交流会を実施し、日米の政治に関する話題について意見交換を行った。

・文学

明治から現代までの短編小説および関連する評論を取り上げ、様々な観点から作品を分析し、話し合いを行った。おおむね2~3回の授業で1作品を読んだ。

・歴史学

日本語で歴史研究を進めていくための基礎訓練を積み重ね、語彙・表現の拡充を図った。第3学期から第4学期前半は学生の興味・関心・必要性に応じて、専門書および一次史料を素材とする読解練習を行った。第4学期後半は、各学生が自分の研究テーマに関する資料を選び、2時間の授業を構成する取り組みを行った。例年行っている横浜市中央図書館、国会図書館等の見学は、本年度は中止した。

・法律

憲法、民法を中心に、刑法、知財法、会社法の一部を取り上げ、条文・判例を自力で理解できる技能を育成することで、法律に関わる話題について自ら調べ、それを説明し、自説を展開できるよう指導した。なお、例年行われている日本大学法学部大学院のゼミ聴講、裁判所・検察庁見学等の活動については、オンライン化に伴い、本年度は中止した。

・日本学概論

専門が定まっていない学生、幅広い分野で活かせる日本語力を追及したい学生などを対象に設けられた選択科目である。選択Aの専門分野を中心に日本研究や日本についての多種多様な教材を用い、知識を蓄え、理解を深めたのち、互いに話し合うことで日本語力の定着を図った。

6-1-3 選択B

選択Bでは必要とされる、あるいは弱点と思われる日本語力の増強のために、「話す」「聴く」「読む」「職場の日本語」の4コースを開講した。火曜の計7日間14コマをあてた。

・話す

第3学期は4セッションで行われた。議論を中心に行ったセッション、日常会話を中心に行ったセッションがあった。学生の必要性に応じ、イントネーション指導や聴解、議論に使う表現などを扱ったセッションもあった。4学期は日常会話を中心とした1セッションであった。

・聴く

ニュースやドキュメンタリー番組を繰り返し聴き、協働でスクリプトを作成しながら細部まで正確に聴き取ることを目指すセッションと、10分間の解説番組を視聴し、聴き取ったことをもとに質問、確認、再生、まとめ、意見交換などを行いながら理解を深めることを目指すセッションに分けて実施した。

・読む

300～400字程度の短めの文章（毎回3～4編程度）を素材として、そこに書いてある内容を詳しく正確に読み取る練習を積み重ねた。授業では、一文一文の正確な理解から、文と文の関係の理解へと進んだ。また、理解を深める目的で、音読の活動も積極的に取り入れた。

・職場の日本語

ビジネス場面での待遇表現の位置づけで、さまざまな状況における会話練習を行った。また、ビジネス上のコミュニケーション問題の事例を読み、問題の所在、解決方法について考え、ディスカッションを行った。

6-2 4限（通常授業）の内容

月・火・木曜4限は「総合運用Ⅲ」とし、「現代史」「大衆文化」「ビジネス社会」の3つの中から1コースを選択する。いずれのコースも記事の読解、ビデオの視聴、そしてその内容についての討論などの活動が盛り込まれている。計19日間38コマ実施した。2月22日には日本で活躍する卒業生を招き、全学生を対象としてトークショーを開催した
26。

6-2-1 総合運用Ⅲ

・現代史

ムービーフィルムが残されている1900年前後からの日本の歴史を、「戦前の日本1900-45」「敗戦と復興1945-55」「高度成長1955-70」「現代の日本1970-95」の4期に分け、

ビデオと読み物で概観した。

・大衆文化

広い意味での日本の「大衆文化」に関して日本人と話せるようになることを目標とした。「CM」「マンガと教育」「映画とオタク」「言葉と音楽」というテーマで資料を読み、話し合った。また、コース最後には「これって文化？」というテーマで学生各自が発表した。

・ビジネス社会

バブル経済の前後における企業や政府、さらに社会や人々の暮らしの変化を、戦後史にも触れながら追っていった。「アフターコロナとマーケティング戦略」「創業者と起業家」「アベノミクス」「SDGs」などの話題を取り上げた。また、NHKNEWSおはよう日本の「おは Biz」から、毎回一人ずつ学生が興味を持った記事を紹介し、話し合いを行った。

6-2-2 選択C

第3・第4学期には随意選択科目として「文語文法」「漢文」「ビジネス」の3コースを開設し、水曜4限に実施した。「ビジネス」は外部から招いた専門家が指導に当たった。

・文語文法

文語文法の用語や歴史的仮名遣いから導入し、動詞・形容詞・助動詞の指導に進み、文語作品の部分的読解も並行して行った。

・漢文

日本人が書いた漢文や漢文体の素材を取り上げ、読み下しと解釈の練習を行った。まず漢文の基礎構文をおさえ、それを応用して短い文章を読んだ²⁷。

・ビジネス

「日本の産業と金融」を主題に、新聞や雑誌の記事を素材として、ビジネス界の実情にも触れながら、日本経済の現在に至る経緯を紹介し、今後の展望と課題について講義した。元神奈川経済同友会の湧井敏雄氏が指導に当たった。

7 第4学期の教育内容

プログラム最終第4学期の2・3限は、第3学期2・3限と同様の形態をとる。「選択A」は同じコースを3学期から継続履修するが、「選択B」は「話す」のみコースの選択肢として継続し、「書く」「就活の日本語」「現代小説」「日本文化論」を加えた。月曜と水曜に「選択A」、火曜に「選択B」、木曜と金曜に「統合日本語Ⅲ」を実施した。

4限は「プロジェクトワーク」「グループ学習」「日本語能力試験 N1・N2 レベル文法クラス」のいずれか1つの形態を選択し、学習を進めた。プロジェクトワークは各選択者ごとに担当教員と相談の上で任意の時間に週1コマ(50分)実施した。「日本語能力試験 N1・N2 レベル文法クラス」は担当教員のスケジュールに鑑み、全5セクションのうち2セクションを月・木曜の4限に、3セクションを火・木曜の4限に実施した。随意科目である「選択C」は第3学期と同じコースが用意され、やはり第3学期と同じく水曜に開講した。

7-1 2・3限の内容

7-1-1 統合日本語Ⅲ

木曜と金曜に実施した「統合日本語Ⅲ」では、日本語の主に形式面の補強・拡充・総仕上げを目指した。学生の到達度、興味、要望に応じて各セクションでそれぞれに教材を選択し、内容に関連した発話活動などを通じて既習事項を総ざらいし、日本語の知識をより確実なものにするとともに、上級日本語話者が知っておくべき事項の欠落を補うなどした。16日間32コマをあてた。

7-1-2 選択A

第3学期と同じコースを継続履修する。16日間32コマをあてた。各コースの内容については6-1-2を参照されたい。

7-1-3 選択B

第4学期の火曜は、第3学期と同内容の「話す」に「書く」「就活の日本語」「日本文化論」「現代小説」を加えた計5コースを開設した。第3学期同様日本語力の増強を図ることも可能であるし、また、まとまった内容のものを読むという目的で「日本文化論」「現代小説」を選択することもできる。8日間16コマをあてた。（「話す」コースについては6-1-3参照）。

・書く

随筆から小論文まで、目的に合った幅広い文章表現力の習得を目的とした。毎週、宿題として各種の文章を書き、授業ではそれを全員で検討・批判しあい、日本語らしい文章の書き方と推敲の技術について考察した。

・就活の日本語

就職活動を考えている学生を対象とし、オンライン面接の練習、メールの課題提出など

を通して、事例に即した解説を加えながら実践指導をした。また、元神奈川経済同友会の湧井敏雄氏が面接官となり、模擬就職面接を行った。(6-2-2「選択Cビジネス」参照)

・日本文化論

青木保著『日本文化論の変容』を素材とし、各学生が担当箇所を分担した。担当者は事前にレジメを作成し、発表と話し合いを行った。本文で著者が引用した文献を追加資料として配付し、十分な内容理解を目指した。

・現代小説

現代作家による短編あるいは中編小説を読み、論じた。授業では予習を踏まえて学生間の議論を促し、作品の「読み」を相互に深めあった。教材として、村上春樹、向田邦子、江戸川乱歩、宮部みゆき、本谷有希子、川上弘美、小川洋子の作品を扱った。1作品につき短編は1回、中編は2回の授業を費やした。

7-2 4限の内容

第4学期の4限は「プロジェクトワーク」「グループ学習」「日本語能力試験N1・N2レベル文法クラス」のいずれかの学習形態を選択して学習を進めた。また第3学期と同様、随意選択科目である「選択C」を開講した。選択Cについては6-2-2を参照されたい。

・プロジェクトワーク

プロジェクトワークでは、各学生が個人またはグループで自己の専門や興味ある分野の主題を選び、その内容に比較的詳しい教員から個別の助言を受けながら、調査研究や文献の読解などを行う。今年度は28名の学生が選択した。グループは結成されなかった。テーマに関しては卒業発表会の内容と重なる部分が多いので、そちらを参照されたい(8卒業発表会を参照)。学生1人につき週1日、計8コマ(1コマ50分)を指導にあてた。

・グループ学習

特定の日本語課題に対して関心を同じくする者が、2～3名程度のグループを構成し学習する。今年度は選択者は存在しなかった²⁸⁾。

・日本語能力試験N1・N2レベル文法クラス

日本語能力試験N1・N2レベルの文型や語彙の習得を目指して、1回2コマのクラス授業を週に2日、計16日間32コマ行った。市販の問題集を使用して知識増強を図り、語彙クイズ、復習クイズ、模擬試験を行った。

8 卒業発表会

卒業発表会は10カ月間にわたる学習の集大成となる催しであり、年度の最終週に挙行される。学生は質疑応答を含め1人15分の持ち時間内で、改まった形式の発表をする。例年はすべての学生と教職員そして来賓が一同に会して開催されるが、今年度は昨年度と同じくZoomを用いたオンライン開催となり、学生を3セッションに分け2日間にわたって実施した。

第4学期の4限にプロジェクトワークを選択した学生は、その時間内に卒業発表の準備を進めた。「日本語能力試験N1・N2レベル文法クラス」の学生はミニ発表会（第2・第3学期の「統合日本語」最終日に開催）などの機会に話した内容を洗練させるなどして卒業発表に仕上げた。それにあたっては学生一人ひとりに割り当てられた担当教員が原稿のチェックを行い、発表の予行演習を指導した（学生1人あたり2コマ分をあてた）。

本センターのウェブサイトにある[「卒業発表会内容紹介」ページ](#)では、過去の年度も含め、題目と要旨を公開しているので参照されたい。

9 通年で実施した学習指導と行事など

9-1 評価

9-1-1 テスト

本プログラムでの学習成果を測定するため、入学直後と卒業時に実力試験を実施した。文法、読解、聴解、漢字の試験、そして面接形式での発話テストを入学時と卒業時に共通して実施し、入学時にのみ作文のテストを加えた。文法のテストは従来入学時にしか行っていなかったが、今年度からは卒業時にも行うこととした。

昨年度の卒業時と同じく、筆記テストはGoogle FormsとQuilgoを用いて非同期的に実施し、発話テストはZoomを用いて実施した。入学時の作文テストではZoomミーティングに全学生を集合させ、辞書の利用を認めて1時間以内にその場で作文させた。例年のように紙に手書きさせるのではなく、Googleドキュメントにタイプして提出させた。

9-1-2 個人面談

本センターでは入学時の実力試験結果をもとに第1学期の授業のセッションを編成するが、コース開始に先立ち、2・3限（文法の授業）のセッション担任教師が自分の受け持つ学生と個別に面談し、試験の結果を踏まえて40週にわたる学習の指針などを助言した。学期末にも担任と学生とが個別に面談し、その間の学習ぶりを振り返り、新たな課題を設定するなどした。

文法の授業のセクション担任と学生の個人面談の機会はその後も各学期末に設け、最終学期にあたる第4学期には10ヵ月の学習を振り返った。

9-2 漢字学習プログラム SKIP

プログラム期間を通じて、常用漢字習得のための自律学習プログラム SKIP (Special Kanji Intensive Program) を実施している。学生は常用漢字すべてを卒業までに習得できるよう毎日教材を独習し、授業以外の時間にクイズ全156回を受けることとなっている。教材には本センター編集発行の市販教材で、漢字を単独ではなく熟語や例文と共に学習できるように構成された『[Kanji in Context](#)』『[Kanji in Context Work Book vol. 1・2](#)』(ジャパ
[ンタイムズ社](#))と、それらをWebアプリケーション化した「[WebKIC](#)」を用いた²⁹。

そして、学習を促すために「KIC 統一試験」を作成し、実施した³⁰。統一試験は、漢字の書き方、読み方等を答えるという問題100問を全学生が受け、点数が6割未満の場合は再試験を受けなければならない。各学期に1~2回、計7回実施した。例年、統一試験は「総合運用」(第1~第3学期)あるいは「統合日本語Ⅲ」(第4学期)の授業時間内に行っているが、今年度はGoogle Classroom上で非同期的に行った。

クイズあるいは統一試験を受ける際、学生は白紙あるいは自分で印刷した問題用紙に答案を記入し、それをスキャンするかあるいはスマートフォン等で撮影するかしてPDFに変換し、提出した。iPad + Apple ペンシルなどの手書き入力デバイスを使い、問題用紙のPDFファイルに直接答案を書き込んで提出する学生もいた。

また、3-2-2でも触れたが、第1学期から第3学期まで本センター教材助手が毎週金曜に30分間の「漢字ミニ講座」をZoomで開講し、漢字の書き方を指導した。

9-3 講演会など、各種の企画や催し

9-3-1 全学生あるいは希望者が対象のもの

全学生を対象とする講演会を1回(2月22日)、希望者を対象とする講演会・交流会・ワークショップを4回(10月24日、1月29日、2月26日、3月12日)、いずれもZoomで開催した。各種の催しは実施順に本稿末の資料に一覧としてまとめた。この表には、本センターが主催した行事だけでなく、相手方の団体から招待を受けて本センターが学生に参加を呼びかけた催事も記載した。

以上の催し以外に、希望学生を対象とした課外活動「古筆クラブ」を設けた。書家の小林紘子氏が指導を担当し、手書きの古典文献を理解するのに欠かせない「くずし字」の読解練習を段階的に進めた。第3・第4学期の毎週金曜日にZoomを用いて実施された。

また、自主運営クラブ「音楽愛好会」のメンバーと顧問である教職員の発案・企画により、第4学期に全学生から参加希望者を募って「ミニ文化祭」を開催した(5月12日)。

「ミニ文化祭」では、腕に覚えのある学生が楽器演奏や歌唱、ダンス、あるいは詩の朗読などを Zoom で披露した。事前にビデオを収録しておきそれを画面共有で発表する学生が多かったが、その場でカメラを前にパフォーマンスを披露する学生もいた。

9-3-2 日本財団フェロープログラム関連行事

日本財団のご厚意により実施している日本財団フェロープログラム³¹では、レギュラーコースの授業と活動に加えていくつかの催しを行っている。今年度は本センター卒業生による2度のワークショップ（1月22日、3月11日）を設け、フェローによる特別発表会を前期（2月3日・5日）と後期（6月2日・3日）の2度に分けて開催した。

10 おわりに

学生と教職員が結局一度も同じ場所で顔を合わせることなく、今年度のレギュラーコースは終了した。完全なオンライン体制を強いられたとはいえ、できるだけ例年のプログラムに劣らないよう多くの技術を活用しつつ日々の教育活動を行ってきたことは上述の通りである。

年度末に実施した学生アンケートでは、最後までオンラインだったのは悔やまれるがそれにしては悪くないプログラムだった、という感想が多い。オンラインでの言語教育が対面でのそれよりも効果や満足度が下がることは自明であるが、学生が年度末に受験した実力試験の点数を見ると、聴解試験がやや低めだったことを除けば例年と比べてほぼ遜色のない結果となっている。ひとえに学生の努力の賜物であろう。大多数の学生が日本で日々日本語を耳にする生活を送ることができなかったのだから、それができていた年度の学生に比べて聴き取りの能力が少し下がるのも致し方ない。

最初はオンラインであっても、年度の途中でいつか日本に渡り対面授業を受けたいと願って入学し、しかし間もなくその希望が失われ、夜も更けた自室の PC モニタの前で卒業に至るまで窮屈に授業を受け続けなければならないと判明した時の学生の落胆は、想像するに余りある。ところが彼らはそれに負けることなく、たびたび見舞われる心身の不調にも対処しながら、最後まで意欲を維持して学び、教職員の叱咤激励に応え続けた。全世界が直面している感染症禍だから仕方ないと割り切るほかに選択肢はなかったとしても、それは並大抵のことではない。各位の奮闘に心から敬意を表する。学生の努力を支えた教職員の熱意にも頭が下がる。

授業内容や試験の結果はともかく、全体的な学生生活として満足のいくものが提供できたかどうかについては忸怩たるものがある。1限と「クラブ活動」の試みは多くの学生に好印象を残したようだが、「寺子屋」は気楽な雑談の場としては機能したものの、高く評価した学生は少ない。

来年度レギュラーコースは、少なくとも第1学期はオンラインで行われる予定だが、その後できる限り早く日本での対面授業が再開できるよう準備を進めているところである。今年度の経験と反省を活かし、オンライン教育のさらなる改善を図らねばならない。

特に、学生間の幅広い交流をいかに促進し、学びの意欲を涵養していけるかは大きな課題である。「寺子屋」と「クラブ活動」は授業時間内に組み込むことで学生の積極的参加を狙ったが、教員の関与を少なくして学生をほぼ放任した前者はオンライン環境では意味が希薄であった。一方、教員が主導して行った後者は学生の満足度は高かったが、教員が研究や教材開発に使うべき時間とエネルギーを奪った。限られた人的資源を大きく費やすことなしに何ができるかは、難しい問題である。

最後に Google Classroom について付言する。今年度新たに採用した Google Classroom は本センター史上初めて導入した LMS だが、学生にとっても教員にとっても有用な道具となった。Google ドライブや Google カレンダーと連携でき、教材や授業予定、そしてその日その日の課題に容易にアクセスできる。作成のために多大な手間と時間を要し、また時折不具合が生じる³²ことは欠点だが、一度ひと通り作ってしまえば将来再利用することができるし、不具合も対処あるいは回避する術はある。Google Classroom は、対面授業が再開した後も利用を継続する予定である。

(あきざわ ともたろう/IUC レギュラーコース言語課程主任)

注

- 1 年度途中の第4学期から急遽オンライン体制に切り替えた昨年度プログラムの詳細と、それについて学生・教員を対象に行なったアンケート調査については、[佐藤ほか\(2020\)](#)を参照。また、開始から終了までを完全オンライン体制で行った2020年度夏期コースについては[結城ほか\(2020\)](#)を参照。
- 2 <https://zoom.us/>
- 3 https://www.google.com/intl/ja_jp/forms/about/
- 4 <https://quilgo.com/>
- 5 <https://remo.co/>
- 6 <https://edu.google.com/intl/ja/products/classroom/>
LMS には Google Classroom 以外にも Moodle などの優れたシステムが存在するが、本センターは従来より [Google Workspace for Education](#) を全面的に活用しており、それと最も相性が良いシステムとして Google Classroom を採用した。
- 7 例年の校外学習のような機会を提供できればという思いから、「連絡掲示板」にはオンラインで参加できる各種イベントの情報も随時掲示した。

- 8 例えば第1学期の「文法・待遇表現」と「総合運用I」は全学生をそれぞれ8つのセクションに分けて授業を行い、セクションごとにクラスルームが設置された。一方、第3・第4学期選択Aの「法律」は単一セクションだったため1つのクラスルームを設置した。
- 9 https://www.google.com/intl/ja_jp/docs/about/
- 10 <https://workspace.google.co.jp/intl/ja/products/chat/>
- 11 <https://slack.com/>
- 12 <https://web.stanford.edu/dept/IUC/cgi-bin/index.php>
- 13 ただし、第4学期のプロジェクトワーク(7-2「プロジェクトワーク」参照)は例年通り1コマ50分とした。
- 14 これらの活動は、性質としては課外活動や自習と呼ぶべき内容のものであろう。対面教育環境であれば、それらは授業の前後に教室の内外で自然発生して学びを豊かに彩る。むしろ学生生活にとって欠かせない要素と言っても過言ではない。しかし、オンライン環境においてはそうした活動が自然に発生することはまずない。それならば、ということで昨年度第4学期は授業後にRemoでオンライン交流の場を提供したが(「放課後タイム」。詳細は[佐藤ほか\(2020\)](#)を参照)、そうした機会の活用を学生の自主性に委ねるだけでは好ましいダイナミズムは生まれにくいことが分かった。また、学生が授業で疲れ切ってしまう、あるいは夜が更けすぎてしまい、その後にさらにオンラインで活動続ける余力が残っていなかったことも、「放課後タイム」が閑散としがちだった大きい理由として挙げられるだろう。そこで、今年度はあえて授業時間内に授業の一環として「課外活動」あるいは「自習」の機会を設け、教員が積極的に学生間の交流を促すことにしたわけである。
- 15 2~4限で例年より授業時間が短縮された分を補う狙いもあった。
- 16 学生はセクションごとに分かれる場合が多かったが、第4学期「話す」など、科目によっては複数セクションの学生が同一のZoomミーティングに参加する場合もあった。
- 17 「毎日のスキル」は、日本語能力試験の過去の読解問題やその対策問題を中心とした小テストを解かせ、読解力の向上を図るものである。
- 18 例年の第1学期は午前の授業と午後の授業とでメンバー編成を変えるが、今年度の第1学期は1限から4限まで同じメンバーでセクションを編成した(3-3を参照)。これにより、4限の単語テストを1限に行ったり、4限の授業で話しきれなかったことを翌日の1限に話したりといったことが可能になった。
- 19 設立されたクラブは以下の通り：盆踊り・ソーラン節クラブ、短歌クラブ、ドラマクラブ、音楽愛好会、ビデオゲームクラブ、ヨガ・ストレッチクラブ、料理クラブ。第1・第2学期のクラブ活動についての詳細は、[大橋\(2021\)](#)を参照のこと。

- 20 自主運営クラブの参加者は、特に第3学期は選択Cの授業と時間帯が重なることもあって多いとは言えなかったが、有志の学生によって3つのクラブ（沖縄研究会、音楽愛好会、ドラマクラブ）が成立した。特に、音楽愛好会の活動は第4学期に全学生参加の「ミニ文化祭」に発展した。ミニ文化祭については9-3を参照のこと。
- 21 学生は「寺子屋」クラスルームに掲載されているURLを開いてブラウザ上にRemoのサービスを立ち上げ、ミーティングに参加する。全学生が同一のミーティングに入る。ブラウザの画面には本センターのキャンパスを模した図面が展開される。図面には多くのテーブルが配置されており、参加者は任意のテーブルを選んでそこに「着席」する。すると同じテーブルについている最大6名の参加者の間で音声・ビデオチャットを行うことができる。学生は自由にテーブルを移動して仲間と雑談してもいいし、どこかのテーブルについていながらマイクとカメラをオフにしてモニターの前で自習してもいいこととした。寺子屋には教員も4名参加し（常勤1名と非常勤3名）、随時学生からの質問を受付けたり学生同士の話し合いに加わるなどした。
- 22 学生同士の交流を促す他の施策として、スタンフォードオフィスのスタッフも本センターの授業時間の前後にRemoで「バーチャルIUC」と名付けたミーティングを開催し、それぞれ異なる時間帯に属する学生が最大限互いの交流を図れるよう配慮した。
- 23 授業開始第1週の水曜4限はRemoで「歓迎パーティ」を開催した。クラブ活動は第2週の水曜に開始した。
- 24 1コマあたりの授業時間については3-2を参照のこと。
- 25 6-1-1を参照のこと。
- 26 稿末の資料（通常授業以外の各種イベント）を参照のこと。
- 27 オンライン化に伴い、学生の側からアクセス可能な辞書がばらばらとなり、辞書の使用法に関する指導にやや難しさが生じた。
- 28 オンライン環境のもと、学生同士で自由に相談する機会が作りにくかったことが1つの要因と思われる。
- 29 例年は書籍を全学生に購入させているが、今年度は希望者が各自で購入するよう推奨した。
- 30 作成には、WebKICのテスト作成機能を用いている。
- 31 https://iucjapan.org/html/curri_regular_j.html
- 32 クラスルームをコピーした時、課題に添付されたファイルが正しくコピーされない場合がある、コピーされてもしかるべきフォルダの中に配置されない場合がある、等。

参考文献

- 大竹弘子 (2021) 「2021 年度漢文夏期集中コース報告」 『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』 第10号 pp.90-93
 <https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2021_Otake.pdf>
- 大橋真貴子 (2021) 「オンライン環境における『クラブ活動』」 『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』 第10号 pp.14-23
 <https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2021_Ohashi.pdf>
- 佐藤有理・佐藤つかさ・小峰克之・秋澤委太郎・結城佐織・青木惣一・大橋真貴子・橋本佳子・千田昭予 (2020) 「遠隔教育による上級日本語教育実践報告—ICT を活用したオンライン授業移行への対応と課題—」 『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』 第9号 pp.1-21
 <https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2020_SatoAri_et_al.pdf>
- 千田昭予・橋本佳子・本間光徳・川西由美子・加藤陽子・後藤恵利・結城佐織 (2021) 「20-21 年度夏期コース報告」 『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』 第10号 pp.69-89
 <https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2021_Senda_et_al.pdf>
- 結城佐織・千田昭予・本間光徳・川西由美子・白石恵利奈・小峰克之・橋本佳子 (2020) 「2019-20 年度 夏期コース報告」 『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』 第9号 pp.80-102
 <https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2020_Yuki_et_al.pdf>

【資料】2020-21 年度 通常授業以外の各種イベント
 (全て Zoom によるオンライン開催)

2020 年

- 10 月 24 日 (土) IUC レクチャー・シリーズ
 グレン・S・フクシマ氏 (米国先端戦略研究所上席研究員)
 “The 2020 U.S. Presidential Election and U.S.-Japan Relations”
- 11 月 29 日 (日) 国立歴史民俗博物館見学

2021 年

- 1 月 22 日 (金) パトリシア・L・マクラクラン氏 (テキサス大学オースティン校教授)
 “The State of Japan Studies: Past, Present and Future”

- 1月29日(金) ジョン・ナイリン氏 (Foreign Service Institute Yokohama 所長)
との交流会
- 2月3日(水) 日本財団奨学金受給生前期特別発表会
- 2月5日(金) 同上
- 2月22日(月) ジェイ・アラバスター氏 (2004-05年度卒業生)
映画『おクジラさま』トークショー
- 2月26日(金) 横山百合子氏 (国立歴史民俗博物館 教授)
特別講義「近世史料を読む——明治5年芸娼妓解放令と遊女——」
- 3月11日(木) ロバート・キャンベル氏 (1979-80年度卒業生) との
ワークショップ “My Path to Japanese Studies”
- 3月12日(金) ジェイソン・P・ハイランド氏 (1979-80年度卒業生) との交流会
「外交官としての使命」
- 5月12日(水) 在校生によるミニ文化祭
- 5月22日(土) ダグラス・バサカー氏、キャット・ジョプリン氏 (2018-19年度卒業生)
Tokyo Academics 会社説明会
- 6月2日(水) 日本財団奨学金受給生後期特別発表会
- 6月3日(木) 同上